

アフリカを緑に— ケニアと日本の森づくり40年の軌跡

半乾燥地での社会林業プロジェクト

1980年代の東アフリカ。
気候変動に伴う砂漠の拡大や
人口増加による過剰な森林伐採が、ケニアをむしばんでいた。
およそ9割が乾燥・半乾燥地の国土において
緑を守るには、乾燥地に強い苗木作りの技術と、
住民による自発的な植林活動に期待するほかない。
JICA専門家たちとケニア森林研究所は、
共にこの問題に取り組んだ。
1980年代に3%未満だった森林率を、
2022年には8%まで大きく伸張させた。
日本とケニアが40年の歳月をかけて確立した
「社会林業」という壮大な緑化へのアプローチ
——その全貌を一冊に収めた。

目次

- 序章 なぜアフリカに緑の国際協力なのか
- 第1章 半乾燥地における社会林業（1985～1987年：壮大な構想と現実の葛藤）
- 第2章 試行錯誤の「住民による森づくり」（1987～2009年：普及モデルの開発と普及強化）
- 第3章 気候変動に負けない森をつくる（2012～2017年：タネを播いて木を育てる）
- 第4章 ケニア内外での気候変動対策や地域協力（2016年以降：ケニアを拠点とした地域への広がり）
- 第5章 人を育て、森林を育て、未来を育てる（社会林業から共創型アプローチへ）

著者紹介

清水 正

1965年茨城県水戸市生まれ。(株)タック・インターナショナル主任調査員（在オランダ）。北海道大学農学部林学科およびオランダ・ワグニンゲン大学修士課程（熱帯林業）修了。専門は森林保全、気候変動対策、天然資源管理。
1988-1990年に青年海外協力隊（ネパール・昭和63年度1次隊・自然エネルギー利用学）として初めて開発途上国での技術協力を経験。国際協力機構（JICA）専門家（ネパール、ボリビア、ペルーなど）、国連食糧農業機関（FAO）本部林業局、米州開発銀行（IDB）本部持続的エネルギーおよび気候変動課勤務などを経て、2020年12月から3年半JICAケニア事務所にて気候変動対策や森林保全、食と栄養改善などを担当。2024年10月から半年間国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）研究員。
著書に、「世界に広がるフェアトレード」、「青年海外協力隊がつくる日本」、「異文化と向き合う国際協力」（すべて創成社新書国際協力シリーズ）ほか多数。個人ホームページ（<https://mori-oka.com>）にて、これまでの赴任国における活動記事（岩手日報の「世界は今」）やコラムなどを掲載。

本庄 由紀

1969年奈良県奈良市生まれ。武庫川女子大学家政学部被服学科卒業、神戸大学大学院国際協力研究科修士課程およびナイロビ大学大学院農村社会学・コミュニティ開発修士課程修了。専門は地域・コミュニティ開発。
1996-1998年に青年海外協力隊（平成7年3次隊・婦人子供服）よりヨルダンに派遣され、活動は人々に支えられたからこそ完遂できた体験が、今の国際協力活動の基盤となっている。UNDPモーリシャス勤務を経て、JICAジュニア専門員時代に、ケニア小規模農民園芸プロジェクト（業務調整／研修計画管理）に派遣される。その後、NPO法人・道普請人ケニア支所では、若者のための道づくりをビジネス化とする活動に関わる。その後、ケニア持続的森林管理のための能力開発計画（CADEP-SFM）およびケニア持続的森林管理・景観回復による森林セクター強化およびコミュニティの気候変動レジリエンス計画（SFS-CORECC）にて、長期専門家（地域協力／業務調整）として2016年から2024年まで従事した。



書籍紹介

ISBN：978-4-910089-78-2
発行日：2026年6月5日 A5判218頁 並製本
定価：1,100円（10%税込）
※電子版は電子書籍ストアでお求めください。